

『東アジア史のなかの日本と朝鮮：古代から近代まで』 吉野誠 著 (明石書店) 310p.

日本の過去の歴史に大きく関わっている朝鮮そして中国。日本も律令制度が確立されるまでは倭国と呼ばれており、著者はこの時期について、朝鮮と同じく中国との「君臣関係」に置かれていたと述べています。また、倭国が日本と呼ばれるようになってからは、天皇制度に根差した中国に似た支配構想を持つようになり、隣国朝鮮に対しての宗主国になりたいという潜在的な野望を抱くようになったとしています。特に18世紀には、その思想は「日本は全ての国より遥かに優れている」とする国学によって理念化され、林子平や吉田松陰、西郷隆盛に見られるアジア侵略論に発展したと見ている点は、本書の最も重要な部分と思われます。太平洋戦争が終結した近代までの、日本と朝鮮・中国との貿易や、遣唐使、朝鮮通信使など、日本を軸とした両国との外交関係の仕組み、戦争にまで発展した経緯、そして当時の三国の国内事情が客観的に描かれていた書物です。

210.18-Yos

『幕末歴史散歩：東京篇』 一坂太郎 著 (中央公論新社) iii, 320p.

東京には徳川幕府の幕臣だった人々の墓碑や記念碑だけでなく、討幕派といった幕府に敵対する人々の墓碑や記念碑も数多く存在しています。上野公園の西郷隆盛像はその例の一つです。本書では、佐久間象山、勝海舟、井伊直弼といった、私たちもよく耳にする人物の墓碑や記念碑が掲載されていますが、山岡八十郎、堀直虎など、一般に余り知られていない人物の墓碑や記念碑も少なからず見られます。しかし、こういった人々も幕末の時代を生き、その時代を支えた人々であり、忘れられてはならない存在です。幕末の時代を舞台に、目指すものこそ一致しなくとも、自らの信念に忠実に生き、死んでいった人々。これらの墓碑や記念碑は、彼らの生き様や活躍した時代に起こった社会を揺るがす数々の事件について、黙しながらも私たちに語りかけています。

210.58-Ich

『琉球と琉球の人々：琉球王国訪問記 一八五〇年十月』

ジョージ・スミス 原著 山口栄鉄, 新川右好 訳 (沖縄タイムス社) 138p.

江戸時代の末期に当たる1850年10月、キリスト教布教のため琉球に滞在していた英国人医師にして宣教師のベッテルハイム。彼の長期間に及ぶ布教活動を妨げようとしたことから発生した、琉球王朝と英国の対立。その背景には、イギリスと中国の間に起きたアヘン戦争やモリソン号の日本来航など、中国と日本を巻き込んだ国際問題があり、琉球は両国の事情に配慮せざるを得ない微妙な立場にあったと言われています。本書の原著者ジョージ・スミスは、このような琉球王朝の有様を批判する一方、琉球人の持つ純朴でつましい人柄、琉球語の音声の美しさなど、琉球の伝統・文化面での長所もこの訪問記の中で書き記しています。イギリス国教会司教という彼自身の立場上、いささか主観的な見方もありますが、その当時の琉球の様子を詳細に書き綴っています。

291.99-Smi



いなぎ ひろゆき (係)